

論文審査の要旨	
筆頭著者（学位申請者）氏名	齊木 祐輔
主論文の題目 および 掲載・審査委員	題目 Biopsy Remains Indispensable for Evaluating Bone Marrow Involvement in DLBCL Patients Despite Use of Positron Emission Tomography (びまん性大細胞型B細胞リンパ腫患者の骨髓浸潤評価において、骨髓生検は陽電子放出断層画像(PET)導入後も不可欠である)
	掲載誌 International Journal of Hematology 2021 (in press)
	主査 三村 秀文 副査 小池 淳樹 副査 砂川 優
<p>[論文の要旨・価値]びまん性大細胞型B細胞リンパ腫(Diffuse large B cell Lymphoma:DLBCL)の初回治療前の病期診断における骨髓浸潤の評価はPET/CTが推奨されているが、骨髓生検(Bone Marrow Biopsy:BMB)も必要かについては議論がある。本研究ではDLBCL患者におけるPET/CTとBMBの結果を比較し、PET/CTの骨髓浸潤診断における感度・特異度やPET/CT、BMBの予後に対する影響等について検討した。初回治療前の病期診断としてPET/CTとBMBの両方が行われている84例のDLBCLの症例を対象とした。骨髓浸潤の有無はBMBで判定し、基準とした。HE染色とCD20染色の2つを用いて、骨髓浸潤の陽性/陰性を判定した。PET/CTでの骨髓浸潤の判定はDeauville Criteriaでの4もしくは5を陽性とした。対象患者84例のうち、PET/CT陽性は16例(19%)で、BMB陽性は22例(26%)であった。PET/CTおよびBMBの両者が陽性の患者は8例(10%)であった。BMBの結果を基準として、PET/CTの骨髓浸潤診断の感度は36%、特異度は87%で、陽性適中率は50%、陰性適中率は79%であった。BMB陽性の22例は陰性の62例と比較して無増悪生存期間(Progression-Free Survival:PFS)が有意に短かく($P=0.006$)、全生存期間(Overall Survival:OS)も有意に短かった($P=0.02$)。PET/CT陽性の16例の中で、BMB陽性の8例を陰性の8例と比較すると、PFSが有意に短く($P=0.025$)、OSも有意に短かった($P=0.04$)。未治療のDLBCL患者において、骨髓浸潤の評価にはPET/CTだけでなくBMBも必須である。</p>	
<p>[審査概要]審査は主査、副査、他4名陪席のもと行われた。約20分間のプレゼンテーションの後、約50分間の質疑応答があった。質問事項は症例の除外基準、PET/CTとBMBの検査の選択方法、陽性/陰性の判定基準、骨髓浸潤がある場合の治療方針、既報告との相違についてなど、多岐にわたり、申請者は概ね的確に回答した。</p>	
最終試験結果の要旨	
<p>[研究能力・専門的学識・外国語(英語)試験等の評価]申請者は研究デザイン、画像解析、統計解析を含め研究の大部分に関与し、プレゼンテーションは分かりやすく的確であり、当該研究領域において十分な専門知識を有し、研究・発表能力があると判断した。英語試験では関連文献の一部を英訳し、研究に必要な語学力があると判断された。真摯な態度からも、申請者は学位授与に値すると判断した。</p>	